

昨日は春分の日。昼と夜の時間がほとんど同じ、節目の日でした。お彼岸のお墓参りに行かれた方もいるのではないのでしょうか。

このお彼岸はもともと、心^{こころ}安らかに生きたいと願い、それを実現するための六つ^{こころが}の心^{ろくはらみつ}掛け「六波羅蜜」を修行する一週間です。

六つ^ふの心^せ掛けとは「布施^{じかい}・持戒^{にんにく}・忍辱^{しょうじん}・精進^{ぜんじょう}・禅定^{ちえ}・智慧」です。今朝は、その中の三番目である「忍辱^{にんにく}」についてお話を致します。「忍辱^た」とは「堪え忍ぶ」という心掛けのことです。

ある日の法事でのことです。そのご一家は、お父さんとお嬢さんと息子さんの三人家族でした。亡きお母さまの法事であったのに、いらっしゃったのはお父さんと息子さんでした。法事の後、お父さんとお話をしていたら、「今日、娘が来なかったのは、実は私が悪いのです。学校を卒業して就職もしました。一人前の大人になったと喜んでいたのですが、社会人になったのにもかかわらず、休みの日には一日中家でゴロゴロ。学生の頃と変わらない、いえ、もっとだらしなくなってしまったような気がして、ちゃんと自立しろ！親に甘えるな！と強く意見してしまっただけです。それから^{しばらく}暫くして、娘は勝手に家を出て一人暮らしを始めてしまっただけです。考えてみれば、慣れない仕事を始めたばかり。平日は会社で頑張っているのに、休みの日まで頑張らせるなんて無理なんですよ。それなのに、あの時は、自分のイライラした感情ばかりに目が行ってしまって……」と。自らの「怒り」に気が付いたその方は、もう「怒り」の言葉を口にしないと誓ったそうです。次に娘さんに会った時には愛情ある言葉をかけたことでしょう。

お釈迦さまはいいました。「怒りの炎は全てを焼き尽くす」「もし怒りのままに振る舞えば、それは自分の人生を^{あやま}誤りに導き、それまでの善い行いも台無しにしてしまう。忍耐^{にんたい}することは、それだけで、^{きび}厳しい修行にも勝る善い行いである」と。

ただ^た堪える……。その難しさを知る人は多いでしょう。

世の中には様々な人がいます。他人の手柄を自分の手柄として横取りする人、努力する人を見下す人、心穏やかに過ごそうとしてもそれを^{さまた}妨げる人など……。

しかし、自分の意に反する人がいる限り、私たちは幸せになれないのでしょうか。人間は百人いれば百通り。自分と気の合う人も、互いに理解しあっている人もそれほど多くはないものです。それどころか、ほとんどの人が自分とは違い、

そ
反りの合わない人です。そんな社会でも、違いを認め合い、言うべきところは言
う、聞くべき所は聞くという冷静な気持ちで、折り合いを付けていくことが互い
の幸せに近づく大きな一歩ではないでしょうか。

今日一日、春を待ち望んだ草花くさはなのように、じっと堪え忍たんでみませんか。
「いからない、いからない……。」雪解ゆきどけ待まって、花開はなひらく。

— 終 —